

『ケルズの書』と『ユリシーズ』に関する一考察 — ケルト・アイルランド文化の周縁から普遍への軌跡を辿る —

吉津成久

In the Middle Ages after the 6th century, Ireland, the island country in the west end of Europe, was the outpost of the Christendom of western Europe. Irish monks carrying along the manuscripts of the Latin Gospels with Celtic colored and decorated patterns were engaged in missionary work throughout the pagan lands of the Continent. Actually it was a period when Irish monasticism was in the vanguard of Christian culture. Owing to the Irish monks' missionary works, Ireland succeeded in transforming its peripheral culture into a universal one. Furthermore, Ireland drew missionaries and scholars from several other countries, and it was referred to as "The Land of Saints and Sages."

Then, as time passed, the Irish writer James Joyce, a representative man of letters in the 20th century, strived to produce literary works while keeping the 1914 edition of the facsimile of *The Book of Kells* always at hand for reference while wandering in foreign countries.

This paper explores the spirit of Celtic exile shared by the above-mentioned missionaries and men of letters represented by James Joyce.

In the famous Chi Rho page (folio 34r) of *The Book of Kells* which informs of the Nativity, the letter "XPI" playing the central role in the page corresponds to the central theme of "the encounter of a father (Leopold Bloom) and a son (Stephen Daedalus)" in Joyce's *Ulysses*, and each of several Celtic patterns filling the apertures among Latin letters undulates simultaneously in its own place and illuminates the letter "XPI." This correspondence relates to the fact that each episode of *Ulysses* not only conveys its own independent significance but also illuminates the central theme as its backbone. Also, this correspondence emphasizes the peculiarity of Celtic Ireland's culture. In contrast to the Romans who tried to centralize their culture, the Celts dispersed to the provinces (the periphery or the

frontier) or lived in every corner of the world as exiles or emigrants, so that they have been forming their own peculiar culture which is activated simultaneously in each region and results in an undulating universality.

キーワード：『ケルズの書』 『ユリシーズ』 ケルト・アイルランド 周縁 普遍

1. はじめに

本稿は、アイルランド人の修道士聖コルンバーヌスによる大陸布教活動とアイルランド人文学者ジェイムズ・ジョイスの大陸での文学創作活動に焦点をあて、この二つの活動の原点としてのケルト的「エグザイル」（積極的自己追放、越境）の精神と、その活動の支柱となったケルト四福音書彩色装飾写本『ケルズの書』について考察する。

2. 修道士の大陸布教活動（聖コルンバーヌスを例として）

2.1 アイルランドは6世紀から9世紀にかけて西ヨーロッパキリスト教世界の前哨基地（アウトポスト）であった。聖書の説く求道の道に従って6世紀聖コルンバーヌスが蛮族が住む西ヨーロッパ各地にケルト系修道院を建築した。このアイルランド人修道士による布教活動はその後も続き、彼らが必ず携えたのが教化用の福音書写本であった。かくして、ローマ人によって西の辺境に追いやられたアイルランド人は世界の縁に生きながら、かつて暮らしていた大陸に赴いて修道院文化を根付かせ、周縁の文化を普遍化し、さらに、各国から伝道者や学者を引き寄せて「聖者と学者の地」（The Land of Saints and Sages）という名誉ある称号を受けた。かつてヨーロッパ大陸の中央部から西アジアまで進出していたアイルランド人の祖ケルト人は、やがてローマ人により西の辺境に追いやられ、現在世界の淵に生きている。しかしその辺境性こそがコルンバーヌスの行動に現われたように、かえって大きな活力となり、そのエグザイルの精神が辺境、周縁の負性を逆転させ、修道院文化を周縁から中心に広げてゆく力の源泉となった。

2.2 このような異教の地における厳しい、積極的な布教活動を促す原動力となるアイルランドのキリスト教およびその伝道の特徴とは何かを考えてみる。A. D. 432 聖パトリックによりアイルランドにはじめてキリスト教が伝道された。これは「赤の

殉教」に対する「緑の殉教」を生み出した。聖パトリックは、従来のアイルランドの宗教であるドルイド教という多神教の信仰を頭から否定せず、それをある程度許容しながら、キリスト教との共通点を強調して布教した。国の宗教が変わる時は必ず殉教者が出て赤い血が流れるのが常であるが、世界ではじめて一滴の血も流れなかった。これは「赤の殉教」に対する「緑の殉教」と称された。聖パトリックが野に咲く緑の三つ葉のクローバー「シャムロック」を摘んで三位一体を説いた故事にもとづく。改宗したケルト修道士は、「赤の殉教」に匹敵する、死に直面するような過酷な修業に励んだ。これが「緑の殉教」である。改宗した修道士たちは、内にあっては厳しい修業（福音書写本作成を含む）に励んだ。アイルランド最南端に位置する絶海の孤島スケリグ・ヴィヒールの石室で祈りと写本作業に励んだ修道士たちはその典型である。また、彼らは、外に向かっては貧者、病人などへの援助を施した。これは、コロンバーヌス以来の伝統的精神であり、20世紀、18歳でアイルランド系修道会の一つロレット修道会に入り、その後インドへ渡った故マザー・テレサの生涯かけた活動にも反映されている。

また、アイルランド農村部のカトリック教会神父は、教会の中にあつて教義を説くよりは野に出て罪人に寄り添い、「執り成し」の業に励むことが伝統となっている。例えば、アイルランドの映画に登場するカトリック神父がその典型である。『ライアの娘』（1970）で、アイルランド西方の海辺に住むローザという十代の少女は、中年で未婚の村の小学校教師に恋して押しかけ女房になるが、年齢の差からこの結婚生活はうまくいかず、ローザは事もあるうちに第一次大戦下反英感情渦巻く村のキャンプに赴任してきた若いイギリス軍将校と不倫の恋におちてしまい、村人たちのリンチにあい、丸坊主にされたローザをかばって東奔西走し、遂には村を追い出される彼女に付き添うのが老神父コリンズである。『静かなる男』（1951）では、元プロボクサーでアメリカから故郷アイルランドのcong村に帰ってきたジョン・ウエイン扮する男がモーリン・オハラ扮する村娘と相思相愛の仲になるが、結婚するためには、自由なアメリカと違って、親代わりを勤める娘の兄の承諾を得なければならない。さらに、娘のほうは、長年かかって亡き母とともに貯えた結婚用の持参金を保管者である兄に出してもらわなければならない。だが兄はいずれの願いも頑固に拒絶し続け、とうとう二人の大男の決闘が始まり大騒動となる。最後はハッピーエンドで終わるが、この騒動で娘の味方となって大奔走するのがロネガン神父である。これらアイルランドのカトリック神父たちが地元農民出身の下級聖職者であったことも注目しなければならない。彼らは周囲の農民から浮くことなく一体であつ

た。17世紀末イギリス政府によって制定された異教徒（カトリック）刑罰法は、下層農民の教育を廃した。しかし、農民たちの教育熱は強く、それはやがて生垣学校（ヘッジ・スクール）を生み出すことになる。生垣の内側のように人目につかない場所で秘かに開かれる学校で、生徒の一人が見張り、不審者に気づくとすぐに教師に連絡し、全員が四散して、その日は学校がおしまいであった。この生垣学校の教師が地元農民出身の下級聖職者だったのである。

2.3 アイルランドの民族の祖は、ケルト神話伝説によれば、女神ダーナ（ダヌ）を母とする「ダーナ神族」である。この女神の原型は西アジアの古代宗教におけるキュベレー（Cybele）である。美少年で実はわが子のアッティスを愛するあまり彼を死においやり、その後悔から彼の魂を松の木に宿らせ、植物の精霊として一度死んでも春とともに蘇らせる。このキュベレー・アッティス神話の西アジア古代宗教が二千数百年前ヨーロッパに伝えられ、それをフェニキア人またはシリア人によってまずケルト人の住むイギリス西南部にもたらされ、キリスト教以後も5、6世紀までケルト人の住むところでこの古代宗教の祭儀が残存していた。アイルランドは紛れもなくカトリックの国である。しかしその由来は、カトリック世界の周辺を巡ってこの西の果てまで伝わってきた東方キリスト教であり、土着のケルト宗教であるドルイド教と習合しやすい性格のキリスト教であった。聖パトリックが土着のドルイド教を頭から否定せず、ゆるやかにキリスト教を広めていったことは前述の通りであるが、そこにこうした東方キリスト教的要素があったことは重要である。かくしてアイルランドのキリスト教は一神教である「父」の宗教にケルト伝統の東方的自然観および神秘主義を加味しており、例えば、「神の母の母である聖アンナ」への信仰など、ローマン・カトリックの容認しない要素を多分に含んでいた。その後19世紀にはいると、ダブリンのカレン大司教のもとに、アイルランドのカトリック教会は法王至上主義に立ち、独立革命運動は嫌悪され、ケルト伝来の異端的信仰要素が一掃されることになった。後にジェイムズ・ジョイスがアイリッシュ・カトリック教会を「キリスト教国の端女（はしため）」と呼んで教会から離脱した原因もここにある。

3. 文学者の文学創作活動（ジェームズ・ジョイスとラフカディオ・ハーンを例として）

3.1 「ケルト的エグザイル」という内なる衝動について述べる。ダブリン生まれのカトリック神父がこんなことを言ったことがある。「アイルランド人はアイルランドが嫌いに出て行くのではありません。愛する母国を離れて異郷に生きる人生そのものが神に捧げる苦行なのです」。コロンバーヌスも自らのエグザイルを神の召命としてのみしか言明していないけれども、この、ここに留まれば、またさらに、ここではないどこか遠くへ旅立とうとする欲求は、ケルト人を先祖に持つアイルランド人の「ケルト的エグザイル」という内なる魂の衝動ではなかろうか。それは、作家ジョイスについてもあてはまる。彼の小説はいずれも故郷ダブリンを舞台にしたものである。ダブリンを強く意識しながら、ジョイスは自ら祖国追放者とし、定点であるダブリンに牽かれながらも、さらに遊点を求めて離れてゆく心の欲求に取りつかれた。故郷から自らを追放するということは、聖書の説く求道の道であると同時に、それはアイルランド文学者の宿命の道であった。

ダブリンで幼少年から青年時代を過ごしたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、随筆『幽霊』の中でこう述べている。「生まれ故郷から漂泊の旅に出ることのない人は、一生おそらく幽霊がどういうものか知らずに過ごすかもしれないが、漂泊の旅人は十二分に幽霊がどういうものか知り尽くしている。・・・そしてその漂泊に駆り立てるものは、物質的利益や享樂ではなく、自分が属している社会の安定条件とはまったく矛盾するもの、秘かに内に秘める本性である」。（斉藤正二他訳『ラフカディオ・ハーン著作集第14巻』、恒文社、1983、P. 142）そして、この衝動は、自己の先祖の民（ケルト人）の心性を受け継いだものとしている。定点に立とうとするたびに、「お前さんの本性、本然の姿はそこにはない、どこかほかにあるよ」と割り込んでくるもの、それが漂泊者のみが出会うことの出来る幽霊であるとハーンは言うのである。では、この「幽霊」とはそもそも何者であろうか。

3.2 ハーンは、個人を「複数の自我の集合体」と見る。ハーンは言う。「われわれの生命は過去幾千万億の生命の集合体である。肉体はその無数の物質的象徴にしかすぎない。この過去の生命は滅びることなく脈々とわれわれのうちに生き、その経験は意識の深い奥底に遺伝されてきた」。（Hearn: *The Writings of L. Hearn*, 'Hereditary Memories,' PP.244 ~ 248, & 'Metempsychosis,' PP. 259 ~ 262,

Houghton Mifflin Co., 1988) すなわち、ハーンによれば、われわれが今を生きているのは「無意識の記憶」(Unconscious Memory) によるのであって、そのため、彼は過去の記憶(幽霊)の夢を見続けたのである。さて、この「無意識の記憶」が示すのは、魂から魂への遺伝を指す領域であり、肉体から肉体への遺伝を指すものではない。したがって、その「魂」、「霊」は、例えば、必ずしも肉体上の父から子へ伝わるものではない。全くの赤の他人であっても、何となく懐かしい人に出会ったような経験を持つことがある。その人物と自分は過去の無数の靈魂を共有していたのかもしれない。そこで、アイルランド文学の特性の一つとして、特にジョイス文学の特性として「霊、魂の父・子探し」という主要テーマを考察してみる。

3.3 ジョイスの全作品、特に『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922) は、「魂の父と子の出会い」を中心テーマとしている。古代ギリシャの英雄オデュッセウスが20年間にわたって放浪の末帰還する物語を下敷きにしながら、ジョイスは、現代の1904年6月16日木曜日というたった一日、ダブリンの街を放浪する38歳のユダヤ人レオポルド・ブルームと22歳のアイルランド青年スティーヴン・ディーダラスによる「魂の父と子」の探索と出会いを中心テーマに選んだ。それは「ほんとうの自分」との出会いとでもいえよう。

3.4 22歳のアイルランド人で文学青年スティーヴン・ディーダラス(作者ジョイスの分身)は、『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922)の前作である自伝的小説『若い芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916)で、芸術家を目指してパリに出発する直前の日記に「古の父、古の芸術家よ、永遠に力を与えたまえ」(Old father, old artificer, stand me now and ever in good stead.) (*A Portrait of the Artist as a Young Man*, Grafton, 1987, P.228)と書いて芸術(文学)創造の大志を抱いてパリへ旅立った。「古の父、古の芸術家」は、スティーヴンと同じ姓をもつ工匠ダイダロス(Daedalus)のことで、彼はクレータ王ミーノースの怒りを買って、息子イカロスとともに自分が造った迷宮ラビュリントスに幽閉される。鳥の羽をロウで固めて翼を作り、父子はうまく大空へ脱出したものの、イカロスは父の警告を忘れて太陽の近くを飛び、ロウが溶けて海に墜死する。同様に、スティーヴンは、母危篤の電報でダブリンに呼び返され、カトリック信仰を捨てた彼は、臨終の床で母が懇願したにもかかわらず祈ってやらなかったことを後悔し、激しい罪悪感に苛まれ、自らをハムレットに擬し、喪服を着たままで過ごし、友人たちのからか

いの的になっている。そして、彼らの住むマーテロ・タワーの眼下に、海水を湛えた丸いダブリン湾が広がっている。それは、末期の肝臓癌にかかっている母が嘔吐の発作が起るたびに腐りかけた肝臓から吐き出す緑の胆汁が溜まっている白い陶器のボウルに見える。さらに、スティーヴンの脳裏に、母の姿とともに、9日前にダブリン湾沖で溺れた男の溺死体が浮かぶ。それは、イカロスへの連想から、志半ばにして挫折し、ダブリン湾に転落して溺死しようとしているかのようなわが身の姿と重なる。

3.5 スティーヴンは友人マリガンから「父を探すヤペテ」(Japhet in search of a father) と揶揄される (James Joyce: *Ulysses*, Penguin Books, 1992, P.21)。ヤペテは、旧約聖書創世記9章18節～28節に出てくるノアの三男である。彼の父ノアは酒好きで、ブドウ酒を飲んで乱酔し、天幕の中でアダムのように裸になった。ヤペテは長兄のセムとともに父の着物を取って肩にかけ、後ろ向きに歩いて父の裸体を覆い、二人は顔を後ろにして父の裸を見なかった。ノアは酔いが醒めて息子たちが自分にしてくれたことを知った。セムとヤペテは孝の道にかなうことをしたということで祝福される。スティーヴンの実父サイモン・ディーダラスも酒好きで、スティーヴンが求める父たる權威を備えていない全くの凡人で、彼はそのために心理的に父と袂を分かち、魂の父を探すことを余儀なくされている。『ユリシーズ』では、父であるということの父性に疑いが持たれている。スティーヴンの父性についての疑惑は、男性は、息子も娘もはたして自分の子であるかどうかの確信が持てないという単純な生物学的事実に基づいている。スティーヴンによれば、父性 (paternity) とは法律上の仮構にすぎない。息子の父であって、息子に愛され、息子を愛する父とは何者だろうか (*Ulysses*, P.266)。名を継がせることによって法的に父であることになるが、『ユリシーズ』の下敷きになった『オデュッセウス』で、息子テレマカスが貞淑な母ペネロペイアに教えられてオデュッセウスを父と知るものの、誰も自分の父を知らない。「それを知る者は母だけ」という言葉があり、この反映は「父を知る子は賢明な子なり」というスティーヴンの父サイモン・ディーダラスにあらわれている。前述のラフカディオ・ハーンが提唱した「無意識の記憶」(Unconscious Memory) を通して示されたごとく、ジョイスも、また彼の分身スティーヴンも、父子関係は血の繋がらない男性間に存在するという理念を持っているのである。

3.6 ブルームもスティーヴンも「鍵なし人間」でホームレスである。民族としては、

「ディアスポラ」（流浪）のユダヤ人と「エグザイル」（自己追放）のアイルランド人を代表し、この両者が「魂の父と子」を求めあう。スティーヴンは家庭を捨て、友人の医学生マリガンとアイルランドの民俗研究に来ているイギリス青年ヘインズとともにナポレオン軍の上陸を防ぐためにイギリス政府によって建造された砲台つきのマーテロ・タワーにイギリス陸軍省に家賃を払って住んでいる。しかし、彼はマリガンから金をまきあげられるし、タワーの鍵も要求される。

一方、ユダヤ人で新聞の広告取りをしている38歳のレオポルド・ブルームは、33歳の妻モリーとの間に11年前長男ルーディをもうけたが、その子は生後11日目に死んだ。それ以来妻との性交渉はないが、ルーディーの代わりとなる息子を今からでももうけられないか、あるいは魂の息子に出会えないか、絶えずその思いが脳裏から離れない。そして、妻との間には15歳になる娘ミリーが健在であるが、ブルームは自分がミリーの実の父親ではないのではないかという疑問を捨てきれない。今日1904年6月16日木曜日、ブルームは「さすらいのユダヤ人」にふさわしくダブリン市中を一日中徘徊する。その間、今日自分の留守中に歌手である妻モリーの演奏スケジュールを立てに我が家にやってくる広告業兼興業主ブレイズ・ボイルンと妻との不倫行為を想像して、そのことが脳裏から離れない。やがて、知り合いのサイモン・ディーダラスの息子スティーヴンに出会い、息子のような愛情から、酔いつぶれたスティーヴンを介抱し、我が家に連れて帰る。しかし彼は鍵を持って出るのを忘れていた。今朝友人ディグナムの埋葬に出席するため喪服に着替えた際、鍵を喪服のズボンに入れることを忘れて外出してしまっていたのである。そこで、妻を起こさないよう我が家の柵を乗り越えて半地下エリアに降り、旋錠してない台所のドアから入る。泊まっていくよう勧めるが、スティーヴンは辞退する。午前2時、ブルームはすでに寝ている妻と同じベッドに頭と足をたがいちがいにして寝る。妻モリーは、夢うつつのままに「内的独白」をし、夫と愛人を天秤にかけ、yesという言葉を連発して姦夫ボイルンを捨て、夫ブルームを受け入れようとしているが……………

3.7 このように、スティーヴンもブルームも今日一日「鍵なし人間」（キーレス・パーソン）として過ごすことになる。スティーヴンはもはやタワーに戻るまいと心に決め、ブルームの家に来るまでダブリン市内を徘徊する。家に帰ろうにも帰れないブルームとスティーヴンは、ホームはありながらホームレスというまさに現代無縁社会と同じような状況に置かれている。妻と姦夫にホームを奪われたブルーム、スティー

ヴンを裏切ってイギリス人ヘインズに寝返ったアイルランド人マリガン（篡奪者イギリス人と祖国の裏切り者アイルランド人を象徴）にホームを奪われたステイーヴン、そして二人はそれぞれ魂の父と子を求めている。ユダヤ人とアイルランド人。いずれも他国の人間に領有権を篡奪された民族である。ユダヤ人はローマン・カトリックとナチス・ドイツによって、アイルランド人はローマ人とローマン・カトリック、そして大英帝国によって、ともに篡奪され、迫害され、裏切られ、疎外されてきた。そして、アイルランド人は、先祖ケルト人の代から、ローマとアングロ・サクソンに西の辺境に追い立てられ続けた、ユダヤ人と同じ「さすらいの民」なのである。

3.8 ケルト民族は元来ノマド（遊牧の民）である。キーワードは、エグザイル、ホームレス、目標のない旅、渦巻・循環である。アイルランドで大きなキャンピング・カーで国中を旅して回るジプシー集団を見かける。彼らホームレス集団は「トラベラーズ」と呼ばれ、土地に縛られない生き方を好むノマド（遊牧の民）ケルト民族が生んだバード（吟遊詩人）の子孫であり、中には、19世紀、主食ジャガイモの大飢饉で地主に追い払われた先祖以来さまよい続けている赤貧の子孫もいる。アイルランドのノーベル賞詩人シェイマス・ヒーニーは、1997年11月8日山口で開かれた文学フォーラムでこう言った。「彼らジプシーは、過去に我々の中にあつた放浪の精神を思い起こさせ、すべての人類に共通するホームレスという事実を我々に突きつける。我々はまわりに壁を造って、これは私のもの、ここは私の家というように所有権を主張しているが、それが何を意味するのか。我々一人一人は、この地球上では所詮裸ではないか。アイルランドの文化の奥深くで常にこう囁く声がある。〈物を所有すぎないように〉。物質的に持ちすぎることは精神的な問題を生じる」。

古代からのヨーロッパには二つの文化の流れがある。一つは、定まった目標に向かって直線的に進むローマ的秩序の文化であり、もう一つは、行き着かなければならないような目標が最初から無いケルトの文化であり、それは、聖書「ヘブライ人への手紙」11章8節における「神の召しによって、行き先も知らずに出発した」アブラハムにならって、明確な目的地もなく出発し、蛮族の住む西ヨーロッパに修道院文化を築いた聖コルンバーヌスの行動に示された。この精神の表象がケルトの渦巻文様で、それは「帰着しない文様・言葉」の中をさまよった四福音書彩色装飾写本『ケルズの書』の製作者である修道士や言葉・文学の革命児ジョイスの創作態

度に顕著である。そして、四福音書写本の中で最も際立つ渦巻文様は、世界・自然の「循環」をあらわす。リサイクルという言葉とそれに込められた理念もケルトに由来し、それは、ローマに起源を持つ直線的物質文明とは対照的な伝統を示しており、後者は、近代以降イギリス、アメリカ、また明治維新以降の日本に受け継がれた前進思考の文明である。

3.9 アイルランドには、エグザイルの一つとして「航海者」、ナビゲイターの伝統があり、それは『聖ブレンダンの航海』から『ユリシーズ』へとつながる。〈僧衣のシンドバッド〉と称される6世紀のアイルランドの修道士ブレンダンは、神より「約束の地」の在り処を告げられると、櫂の木で船を仕立て、航海に先立ち弟子たちと共にアラン島の聖エンダの祝福を受けて旅立った。彼らは不思議な動物が棲むいくつもの島々を巡りながら7年を経て霧に包まれて果物がたわわに実る広大な「約束の地」に至る。アイルランドの西の彼方に異界（至福の地、常若の国）を見るケルトの信仰を受け継いだもので、実はブレンダンが行き着いた先は聖コロンバヌスのそれとは反対側のアメリカ大陸であった。その航海譚が『聖ブレンダンの航海』という800年ごろ書かれ、広くヨーロッパに流布した中世のオデュッセイである。その内容は、聖ブレンダンによる「新大陸アメリカ発見」を史実として裏書するものであるとされてきた。

ブレンダンの航海から約千年後の1492年8月、スペインのバロス港を出帆したコロンブスは、ジパングのはるか東の海上に聖ブレンダンがたどり着いた「約束の地」と記載された海図を携帯していた。無論、アメリカという地名はこの海図にまだ載っていなかったが。ちなみに、コロンブスはアイルランドの西の都ゴールウェイに立ち寄り、聖ニコラス教会で航海の安全を祈願している。聖ニコラスは子供の守護神、またはサンタクロースとして知られているが、当時は漁師や航海者の守護神として崇められた。

時は流れ、20世紀初頭、大作家ジェイムズ・ジョイスは放浪先のヨーロッパ大陸から一時帰国し、アラン島の断崖ダン・エンガスに立って先人たちの航海に想いを馳せ、みずからの物語に『ユリシーズ』（オデュッセウス）の名を与えた。ジョイスの顔にナビゲイターのイメージを抱く人がいる。ダブリンのジョイス博物館にある彼のデスマスクはまさにボートの形を成し、高く盛り上がった額は船尾、突き出た顎は船首のようである。

4. 「魂の父」としての資質 ① ～ ギャレット・ディージー

4.1 魂の父を求めるスティーヴン・ディードラスにとっては、司祭も大学の教師も学生監も、その多くが父たる存在になる可能性を与えられている。そして、彼らは性急なイカロスに警告を与える父ダイダロスの役割を負っている。『ユリシーズ』第2挿話は、スティーヴンがタワーから歩いて約15分のところにある私立学校で小遣い稼ぎのために教えている場面である。この学校の校長はギャレット・ディージーといい、アルスター（北アイルランド）出身のプロテスタントで、イギリスの支持者でユダヤ人嫌いである。このディージー校長が、スティーヴンは意識していないが、『ユリシーズ』における彼が求める魂の父の最初の候補者といえよう。ディージー校長は果たしてスティーヴンの魂の父でありうるのか？ 答えは否である。ディージー校長は全く形式ばかりこだわる教育者である。彼は数段積み重ねられたケースの中に収集した数多くの貝殻を陳列している。それは、スティーヴンが「死せる宝、空ろな貝殻」('dead treasure, hollow shells') (*Ulysses*, P.36) と内的独白するように、ディージー校長がユニオニスト（アイルランド自治に反対した統一黨員）として、またイギリス帝国主義者として形式だけの一連のシステムに従順であることを象徴している。また彼はスチュアート貨幣 (Stuart coins) と十二使徒像スプーン、すなわちスティーヴンが決別した国家と教会という二つの統治組織の象徴を収集している。これらは、ディージー校長が自分の学校を精神の改革 (spiritual transformation) の場ではなく「博物館」(museum) に変えていることの象徴である (Declan Kiberd: *Ulysses and Us*, Faber and Faber, 2009, P.56)。

4.2 ディージー校長は、知識というのはダイナミック (dynamic, 動的) なものでなく、二度と変わらない不動なもの (stabilized) であると信じている。彼はオスカー・ワイルドの不満 — 「学び方を忘れた者が猫も杓子も教える道を選んだ」 — のみじめな体現者である (前掲 Kiberd, P.56)。彼が信奉するイギリス帝国主義組織に基づいて提供される学校教育とは、成人 (大人) の基準にとりつかれたもので、それに子供は順応することを強られる。それは、一つしかない答えを子供に求めないで子供の内なる本質に訴えてその考えを引出す教育ではない。スティーヴンは今日の授業で古代ローマ史を教えている。それは、紀元前281年イタリアのギリシャ人植民都市の招きにより海を渡ってローマ軍と戦って敵を敗北させたギリシャ人ピュロスが帰国後内戦に巻き込まれ、アルゴスの町で一老婆がたまたま屋上から投げた

瓦が当たり、落馬したところを討ち取られ意にそまぬ死を遂げる、という史実についてである。スティーヴンが講義の後ピュロスについて質問すると、生徒の一人が「ピュロスですか？ピュロスはピア（pier, 棧橋）です」と苦し紛れの語呂合わせで答える。スティーヴンが「じゃあ聞くが、ピアってなんだい？」とたずねると、生徒は「ピアって、海に突き出ているものです。橋みたいに。キングズタウン・ピアとか。」と答える。するとスティーヴンが「キングズタウン・ピアか。そう、当て外れの橋だね（disappointed bridge）」という（*Ulysses*, P.29）。「ピア」は外国へ向かって海を渡る出発点であり、また外国から帰還する終着点である。「当て外れの橋」は、凱旋將軍ピュロスの意にそまぬ、当て外れの最後を暗示すると同時に、「キングズタウン・ピア」の所在地ダブリンのサンディコーヴが1821年イギリス王ジョージ四世の訪問を記念して「キングズタウン」と名づけられたが、期待に反してアイルランド自治に冷淡であった王が民衆に失望感を残して立ち去ったピアを指し、また、失意のアイルランド人亡命者がヨーロッパ他へ出て行く出発点のピアを指し、そして、パリ留学が不首尾のまま帰還を余儀なくされたスティーヴンの自嘲気味の言葉でもある。スティーヴンの教授法は、一つしかない答えを単刀直入に要求するのではなく、謎々をかけるようにして、生徒の想像を駆り立て、様々な可能性ある答えを引き出そうとするものである。

4.3 ディージェー校長とスティーヴンの教育法の違いは両者の歴史観の違いと関係がある。ディージェー校長は、歴史というものは唯一つの目的、終着駅（destination）に向かって走る電車の直線（a straight line）ととらえている。そのたった一つの目的、終着駅とは「神の顕示」（the manifestation of God）である（*Ulysses*, P.42）。しかし、ジョイスと同世代のアイルランド人にとって、そのような歴史観は受け容れがたいものであった。つまり、それは列車が定められた地点（a definite point）、「キリストの再臨」に向かって線路の上をスムーズに動くことに例えられた人生観に基づくものである。結局のところ、ジョイスの世代の親たちは、何百万人もの人間が飢えで野垂れ死にした国に生きていた。一方ロンドンでは、鉄道が敷かれ、1851年大博覧会が開催され、その会場となる水晶宮（Crystal Palace）が、ヴィクトリア朝の科学と産業の勝利を誇示するために建設されていた。ジョイスやイエイツのような作家にとって、歴史というのは、まっすぐに発展する目標の定まった直線（a straight, progressive, purposeful line）というよりは、再発し、循環するトラウマからなる曲線（円環、a circle）と映った（Kiberd, P.60）。だからスティー

ヴンはディージー校長に対し遠慮がちな反面、校長が示す規範に対して大胆に反発する。ステイーヴンは窓に向かって親指を立ててグラントでホッケーに興じる生徒たちを指して「あれが神ですよ。神は通りの叫び (A shout in the street) ですよ」(Ulysses, P.42) と言い、神は今の今、巷の俗衆の生き様の中に存在するのだと主張する。彼の主張は、神の計画が、詩の作成と同様に、日々の経験から形作られるもので、そうでなければ存在しないということである。ステイーヴンは「創造の動的性質」(the dynamics of creation) を主張しているのである (Kiberd, P.60)。ところで、ステイーヴンの教育法にもどるならば、彼は教師であるが、教えている内容を百パーセントは理解していないという事実があり、それは教育の一つのポイントであろう。知識というものは徐々に、またしばしば予期せぬ形を取って現れるのであって、たとえその知識を持っている当人ですら、いつまでも完璧にマスターしているとは限らない。限られた知性と想像力を持つ人間が、意外にも自分より知性の勝る学生に生きる知恵 (wisdom) を授けることがありうる。ちょうどブルームが1904年6月16日魂の子ステイーヴンにするように。あのソクラテスですら、新しい真実を発見するために間違い (error) に頼った。それは、彼の弟子はもちろん彼自身の間違いでもあった。ステイーヴンは心の中でディージー校長の間違いを正している。さらに彼は後に、天才はあらゆる間違いを新しい発見の入口とし、世の中の理解の助けとしていると考える。ステイーヴン、すなわちジョイスの教育観と歴史観は相通じ合うものであり、「永遠の間違いの循環」(the eternal recurrence of errors) と「円環的歴史観」(the circular notion of history) は関連しあっているのである。我々は間違いながら進むが、それは正しく進む唯一の道であるとステイーヴンは理解している (Kiberd, P.61)。

5. 「魂の父」としての資質② ～ レオポルド・ブルーム

- 5.1 ユダヤ人で新聞の広告取りであるブルームは大学出ではなく、正規の大学教育を受けて知性の勝るステイーヴンにとって果たして「魂の父」となりうるのか？
- 『ユリシーズ』第16挿話で、ブルームは酒に酔ったステイーヴンを助け起こして休憩に向かうが、その途中ステイーヴンは友人のジョン・コーリーに出会い、一文無しの彼から仕事の口を頼まれ、今夜の宿賃をせびられ、半クラウン渡す。見てみぬふりをしていたブルームは、コーリーが慢性金欠病患者で、ステイーヴンを食べ物にしているマリガンを含む連中の一人とにらみ、後で遠まわしながらステイーヴン

に忠告する。正規の大学教育を受けたスティーヴンにとって「人生の大学に通った」(‘……he (Bloom) had frequented the university of life……’) (*Ulysses*, P.798) ブルームの人生訓は、押し付けではなく、スティーヴンの魂に響く力を持っている。そして、二人の心は一つになっていく。「二人の意見は何から何まで完全に一致するわけではないが、何となく似たところがあり、いわば二つの心が同一の軌道の上を走っている」(Though they didn't see eye to eye in everything, a certain analogy there somehow was, as if both their minds were travelling, so to speak, in the one train of thought) とある (*Ulysses*, P.764)。

一方、これに先立つ第2挿話で、ディージー校長はスティーヴンに給料を渡す際にシェイクスピアの『オセロウ』1幕3場におけるイアゴウの台詞 "Put but money in thy purse." (金だけは財布にしまっておけ) をスティーヴンへの忠告として用いる (*Ulysses*, P.37)。イアゴウに金を渡して思いを寄せているデズディモーナとの執り成しを頼んでいたロデリーゴが、オセロウとデズディモーナの結婚承認を知って失望のあまり自殺を図ろうとすると、せっかくの金ずるを失いたくないイアゴウは、ロデリーゴを激励しながら「金だけは財布にしまっておけ」という言葉をくりかえす。ディージー校長は、この言葉を作り出したシェイクスピアがイギリス人として金の何たるかを知っていたという。そして、浪費癖があるとにらんでいるスティーヴンに教訓を垂れようとするのである。イギリス人が一番自慢にしている言葉は「わたしは自分の金で暮らしてきた」(I paid my way.) (*Ulysses*, P.37) という言葉だという。ディージー校長は、貯金によって自分の金をいつも財布に入れておき、借金もせず、しかも寛大で公明正大であること、それがイギリス人の誇りだとする。それは、『ヴェニス商人』におけるアントウニオウの理念、誰にも義理はなく、誰からも利息を取らない主義に通ずるものである。しかもこの場面で、ディージー校長が『オセロウ』の中で当時のイギリス人観衆の黒人への人種差別を代弁するイアゴウの役を演じているのは痛烈な皮肉であり、自己資金をあてに他人に迷惑をかける主義は美德ととなえながら、他人の懐を自分の利得の肥やしにするイアゴウの言葉を無意識に金言として披露するディージー校長は、まさにカリカチュアの的となっている。それは、スティーヴンに「そういうもったいらしい言葉が僕たちを不幸な目にあわせるんです。」("I fear those big words,....,which make us so unhappy." (*Ulysses*, P.38))と言わしめるのである。「僕たち」は、アイルランド人やユダヤ人を指すのであろう。

5.2 既述の通り、アイルランド出身の作家ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は『幽霊』というエッセイを通して個人というものを「複数の自我の集合体」と見る説を発表した。さて、幽霊と心が通じ合えるのはやはり幽霊である。生まれ故郷から漂泊の旅に出る人、定点がありながら遊点をさまよいつづける人、己を理性によって支配される固定した自我と認識せず変容をくりかえしてきた複数の自我の集合体と考える人、彼らは幽霊的存在である。ステイーヴン・ディーダラスは「幽霊」を定義して、「死 (death) によって、不在 (absence) によって、様態の変化 (change of manners) によって、非実体 (impalpability) のなかへ消えていったもの」という (*Ulysses*, P.240)。この定義によれば、シェイクスピアもジョイスも、彼らが作り出した人物たち、先王ハムレットの亡霊もハムレットも、レオポルド・ブルームもステイーヴン・ディーダラスも、そしてラフカディオ・ハーンも、すべて幽霊である。『ユリシーズ』第9挿話で、ステイーヴンが「幽霊話」と称するハムレットの物語を語っていると、影（幽霊）のようにブルームが登場する。「一人の男の影が耳を傾けながら忍耐強く待っていた。・・・腰を屈めた人影が彼の急ぎ足に従った。・・・二人の間を男が通り抜けた。頭を下げて挨拶しながら」。(*Ulysses*, P.279) ステイーヴンはまだこの時点でブルームの存在に気づいていない。ブルームは、ギリシャの英雄オデュッセウスの資質を賦与されて「誰でもいい人間にして誰でもない人間」(Everyman or Noman) であると同時に「あらゆる偉人たちのうちでいちばん謎めいており、生きて悩んだということ以外はすべて黒い影に覆われている」シェイクスピアとともに霊的存在であり、無数の過去の靈魂を持った「複数の自我の集合体」である。このブルームとシェイクスピアという霊的存在との魂の出会いを通して創造主のごとき芸術家になることを目指すステイーヴン・ディーダラス（ジェイムズ・ジョイス）の「自己発見の旅」は、『ユリシーズ』から『フィネガンズ・ウエイク』へと続いてゆくのである。ステイーヴンの理念によれば、既述の通り、父子関係は血の繋がらない男性間に存在する。したがって、ジョイス最後の大作『フィネガンズ・ウエイク』(Finnegans Wake, 1939) の主人公 H.C.E は、象徴的な多重性の父として現われる。肉体的な実父、精神的な父、さては亡霊的な父であっても、いったん父とあれば、あらゆる者の父であって、H.C.E.は「いたるところに子を持つ男」であり、「やってくる誰でもある男」(H.C.E.=Here Comes Everybody)、自分の落果をいたるところに生ぜしめる、普遍的な父性の象徴として再生してくるようになる。

5.3 ブルームのモデルとしてのギリシャのオデュッセウスは、状況に応じてプロテウス的にその身を変える多面的な人物である。ブルームも偏狭なナショナリズムうずまくダブリンにあって、ユダヤ人として疎外されながら柔軟に身をかかわして生きていく術を心得ている。確かに、しょっちゅう間違いを犯してはいるが。スティーヴンは『ユリシーズ』の前作『若い芸術家の肖像』で、パリへ向けて出発する直前の日記で「来たれ、おお、人生よ！ ぼくは出かけよう。現実の経験に百万回も出会い、ぼくの民族のまだ創られていない意識を、ぼくの魂の鍛冶場で鍛えるために」。(Welcome, O life! I go to encounter for the millionth time the reality of experience and to forge in the smithy of my soul the uncreated conscience of my race.) (*A Portrait*, P.228) と書いた。「現実の経験」に間違いを犯しながら百万回も出会うことを覚悟していた。その意味ではブルームは理想的な「魂の父」であろう。

6. 『ケルズの書』と『ユリシーズ』① ～ 中心テーマ「父と子の出会い」の照応 — 大陸布教と文学創造の支柱としての四福音書写本

6.1 ジョイスは終生大陸を流離いながら9世紀はじめアイルランドの修道士が子牛皮紙(ベラム)680頁に彩色装飾した四福音書写本『ケルズの書』(*The Book of Kells*)の1914年復刻版を座右の書として文学作品創作に打ち込んだ。ジョイスは言う。「ローマでもチューリッヒでもトリエステでも、私はどこへ行くときにもそれを携え、何時間もその技を見つめておりました。それは何よりも純粋にアイルランド的で、頁いっぱい広がる頭文字のいくつかは『ユリシーズ』の一章の本質を形成する性格を持っています。」(Richard Ellmann, *James Joyce*, Oxford Univ. Press, 1976, PP.558-9)。

6.2 ジョイスの言う「『ユリシーズ』の一章の本質を形成する」ことを端的に示すのがキリストの誕生を告げる「マタイによる福音書」第1章18節の聖句を彩色装飾したイニシャル・ページ(Chi Rho ページ)である。画面の中心を占める文字XPIは『ユリシーズ』の中心テーマ「父と子の出会い」に照応する。御子イエス・キリストの誕生は、父なる神と子なるキリストの一体を示し、御子キリストとの出会いを通して、子たる人類は、御父なる神の恩寵を受ける。さて、本稿の2章で紹介したアイルランド人修道士たちは大陸への布教活動のために四福音書写本の復刻版を携えた。その写本を代表するのが、ケルト三大彩色装飾写本で、『ダロウの書』

(7世紀後半、聖コルンバによりアイルランドのダロウ修道院で完成)、『ケルズの書』(9世紀はじめアイルランドのケルズ修道院で完成)、そして『リンディスファーン福音書』(8世紀前半、英国北部ノーサンブリアのリンディスファーン島の僧院で完成)である。ジョイスが、大陸を彷徨しながらアイルランド精神を体現する『ケルズの書』の復刻版を座右の書として文学創作に励んだこと、つまり定点である故国ケルト・アイルランドを、故郷ダブリンを中心に据えながら遊点である異郷を流離って「魂の父と子の出会い」を中心とする文学を模索し続けたことは、聖コルンバーヌスに代表される修道士がやはり四福音書を大陸布教と修道院文化構築のための支柱としたことと根本において相通するものであったといえよう。ジョイスは、聖コルンバ(コルムキル)や聖コルンバーヌスをはじめとする聖者や学者が大陸に赴き、周縁の文化を普遍化し、また各国から伝道者や学者を引き寄せて、「聖者と学者の島」という名誉ある称号を授かったアイルランドに生を受けた者として、文学の分野でその伝統を受け継ぐことに誇りを持っていた (James Joyce: Ireland: 'Island of Saints and Sages' in *Occasional, Critical, and Political Writing*, Oxford Univ. Press, 2000, PP.108-126)。

7. 『ケルズの書』と『ユリシーズ』② ～「創造の動的性質」(the dynamics of creation) — 四福音書写本製作者の文様表現形態とジョイスの文学表現形態の共通性

7.1 西欧(オクシデント)文化表現の源流はローマ人の考え方を中心にした、いわゆる古典的表現であるということが定着していたが、特に近年、それと対照的なアルプス北方を始源とするケルト文化がもう一つの源流としてクローズアップされてきている。ローマ人がモノを分節化(アーティキュレーション)し、二項対立的な「枠」による明確な分類をしてそれぞれに「名前」をふっていったのに対し、ケルト人は文字、名前によるモノの分節化、「枠」による一方向性を拒否し、この宇宙に蠢くモノの鼓動とその連続的存在を尊重した。彼らは言葉は最初から存在するモノにきちんと対応する名前としてあるのではなく、文化や環境によって変化し、むしろ曖昧で恣意性の下に成立しているという考えを持っていた。それは、『ユリシーズ』の中で、スティーヴンとブルームが共有する「名前に対する不信感」、「名と実体のずれに対する感覚」、「名によるアイデンティティの曖昧性に対する実感」が "What's in a name?" (「名前なんぞに何の意味があります?」) (*Ulysses*, P.717)

という台詞にこめて表出されている。

7.2 ケルト人は文化の現在性を重視し、文字というものが文化の複製性（コピー）を促し、言葉がはらむ運動的で多様な力を殺すという懸念から、文字を長い間持たなかった（5世紀まで）。その代わりに『ケルズの書』に顕著な連続的で運動的な渦巻文様、組紐文様、巴文様等々装飾文様による表象作業を独自の表現形態とした。これは、ローマ的古典彫刻や美術が「成った（完成した）もの」の形の美を表わしているのに対してケルト文様はひたすら「成りつつある（プロセス）もの」の美を表わそうとしていることを示し、宇宙に在るすべてのモノ（人、動植物を含めて）をそのような存在とみなしたことを物語っている。それは、アイルランド伝統の「変身の神話」に通じる。ジョイスの『若い芸術家の肖像』のエピグラフ（巻頭の銘句）として古代ローマの詩人オウィディウスの『変身物語』（*Metamorphoses*）からの一行「こうして彼はいまだ知られぬ技に打ち込む」が記されている。これは、伝説上の名工ダイダロスがクレタ島を脱出する際の言葉であり、ジョイスの『若い芸術家の肖像』最後のスティーヴン（ジョイス）の言葉「古の父よ、古の芸術家よ」につながるものであり、ジョイスの文学創造の特質を示している。

7.3 言語学の分野で、ラング（*langue*, 言語）が社会的、恒常的で、日本でいえば、「唐言葉」、すなわち官職に就く男性の言葉にあたるのに対して、パロール（*parole*, 言）は個人的、瞬間的、具体的、恣意的で、日本でいえば「やまとことば」、すなわち女性の言葉にあたる。ケルト文様は、辻井 喬も指摘するように、文様におけるパロールである。「枠」にはまって固定したラング的な文様と違い、動物や鳥、虫、人間を分節化せず連鎖させ、連続的で運動的で、終わりなき螺旋運動を続けていく。それは「帰着しない言葉」の中をさまようジョイスの文学表現そのものである（辻井 喬、鶴岡真弓共著『ケルトの風に吹かれて』、北沢図書出版、1994、P.52）。ジョイスは、既存の表現世界を顛倒させ、変幻自在に立ち現れる文様のうねり、ねじれ、ゆがみにあやかって予想を裏切って流れ出る言葉である「ジョイス用語」の創造に打ち込んだ。それはまた、世界や自然は常に変化、変容する可能性として在ることを不断に伝えようとするアートである。

7.4 『ケルズの書』と『ユリシーズ』に共通する表現形態の理念は、前述したディージー校長とスティーヴンの歴史観や教育観の違いにおけるスティーヴンの理念と共

通する。ディージー校長の知識教育についての考えは、「ダイナミック（動的）」（dynamic）でない「不動」（stabilized）なもので、彼の歴史についての考えは、ただ一つの目的（a definite point, destination）である「神の顕示」（the manifestation of God）に向かって決められた軌道を直線的に走る列車にたとえられた。これに対してステューヴン（ジョイス）は、「創造の動的性質」（the dynamics of creation）を主張し、教育及び歴史を「永遠の間違いの循環」（the eternal recurrence of errors）と捉え、そして「円環的歴史観」（the circular notion of history）を持っていた。

8. おわりに ～ 周縁から普遍への波動

- 8.1 ケルト美術研究家の鶴岡真弓はこういう。— ケルト渦巻は常に蠢くものであるかぎり定められた「中心」を持たない。あえて言えば「移動する中心」である。それはこんなケルト伝承の問答とも符合する。— 「世界の真ん中は何処ぞ。」「ここである。汝が今立ちし処なり。」（鶴岡真弓著『ケルト／装飾的思考』、筑摩書房、1994、P.104）（…in Ireland one may still be confronted with the riddle: 'Where is the middle of the world? The correct answer is 'Here' or 'Where you are standing.' (Alwyn Rees & Brinley Rees: *Celtic Heritage, Ancient Tradition in Ireland and Wales*, Thames and Hudson, 1994, P.187)。
- 8.2 『ケルズの書』中のイニシャル・ページの一つ「キリスト誕生」の頁で、画面の中心となる XPI は『ユリシーズ』における「父と子の出会い」という中心テーマと照応し、『ケルズの書』におけるケルト文様は、それぞれ各部分が同時多発的に波動しながら中心の XPI をイルミネートしている。それは、『ユリシーズ』において各挿話がそれぞれ独立した意義を伝えながら、同時に背骨としての中心テーマを照らしていることに通ずる。中央に直線的に結集するローマ文化と対照的に、ケルト文化は、地方（周縁、辺境）に散りながら、あるいはジョイスに代表されるようにエグザイルや移民として世界各地に散りながら、その各部分が自己のアイデンティティに深く関るアイルランドを中心に据えて、移動しながら同時多発的に動き、普遍的に波動してゆく特質を伝統としている。

引用&参考文献

- Cahill, Thomas: *How The Irish Saved Civilization*, Doubleday, 1995
- Ellmann, Richard: *James Joyce*, Oxford Univ. Press, 1976
- Hearn, Lafcadio: *The Writings of Lafcadio Hearn*, Houghton Mifflin Co., 1988
- Joyce, James: *A Portrait of the Artist as a Young Man*, Grafton, 1987
- Joyce, James: *Ulysses*, Penguin Books, 1992
- Joyce James: *Occasional, Critical, and Political Writing*, Oxford Univ. Press, 2000
- Kiberd, Declan: *Ulysses and Us*, Faber and Faber, 2009
- Meehan, Bernard: *The Book of Kells*, Thames and Hudson, 2006
- Rees, Alwyn and Rees, Brinley: *Celtic Heritage, Ancient Tradition in Ireland and Wales*, Thames and Hudson, 1978
- Walker(ed.), G.S.M.: *Sancti Columbani Opera*, Dublin, 1957
- ハーン、ラフカディオ著、斉藤正二他訳『ラフカディオ・ハーン著作集』、恒文社、1983
- ジョイス、ジェイムズ著、丸谷オ一、永川玲二、高松雄一訳『ユリシーズ』全三巻、集英社、1966-7
- ジョイス、ジェイムズ著、丸谷オ一訳『若い芸術家の肖像』、集英社、2009
- 辻井 喬、鶴岡真弓共著『ケルトの風に吹かれて』、北沢図書出版、1994
- 鶴岡真弓著『ケルト／装飾的思考』、筑摩書房、1994

※本稿は、日本キリスト教文学会2011年度第40回全国大会シンポジウムで発表した原稿を加筆、修正したものである。